

花の林（一）

土田龍太郎

伊勢物語に載れる歌げにあまたにて二百首を下らず、風躰またさまさまにて一とほりならねど、在原業平朝臣、寛平延喜よりもなほ上つ方の人なれば、この物語の内にて昔男のものせる歌、ことばやや古めかしく聞ゆることこそあれ、さまで巧までなだらかに詠み下せるもの少からぬはさることにて、ねぢけがましくいりほがなるものなきはげにことわりとぞいひつべき。さはれ作者なにとやらむおぼめかしく詠みなせるままに、一首のおもむきとみにはえ悟りがたくなりぬるためし、たえてなしとも言ふべからず。かかる歌どもの中に、今ここに勘へまくほりするは、第六十七段に載れる花の林を詠める左の一首にぞある。

きのふけふ雲のたちまひかくらふは

花の林をうしとなりけり

諸本の内には、たちまひかくらふはならでたちまひかくさふはと讀めるものあり。

草子地によるに、男のこの歌詠めりしは、ある年の如月に和泉よりはるか河内の生駒山を眺めやりしをりのことなりけり。この時、峰の木末こずゑに雪降りわたりてさながら白き花咲けるにたれど、山は朝あしたに曇り晝には晴れて雲の立居定たちあかならざりけり。業平朝臣とおぼしき男かかるありさまを見て、右の一首を詠めるにてぞありける。

上の句にて雲がかくらふこともしは雲が樹々をかくさふことを述べたることばかりは疑ふまじけれども、雪の白く降りて花の林のごとくなれるならばいともめでたきけしきなるべし。下の句にてはかへりてそをうきものに言ひなせるはそもいかなるゆるゑにやあらむ、いともいぶかしと思はではあるべからず。

この花の林の歌につきてかれこれ考へむに、ありとある伊勢物語註釋のたぐひさながらけみせむは、ことしげきのみにてさしもかひありとは思はれず。今はわが目にとまりしもののみにつきてただ一わたりばかりたどらむほかせむすべなきにいたり。

かの後成恩寺禪閣一條兼良のものせし伊勢物語愚見抄を見るに、空晴れて雲のかくろへるは、雪の林あまりにめでたければ雲の妬みて見じとて隠れたるにこそあれと説きなしたり。

種玉庵宗祇の伊勢物語山口抄によれば、雲のかくろふにはあらで雲の花を隠しつるにてぞある。この法師の云へらく、時もこそあれきのふけふこの山を雲の隠しつるは、花の林を人に見せむことを雲がうしと思ひけるよといふ心なりと述べて、狂雲妬佳月といふ古き詩句を引きつつ、雲が花を妬むおもむきにとりなせり。

伊勢物語肖聞抄に載れる牡丹花肖柏の解きやう、その師宗祇の言へりしにほぼ同じくて、ここにも狂雲妬佳月の句を引きたり。

逍遙院三條西實隆出家して堯空と名乗りたれど、惟清抄といへるその伊勢物語註釋今に遺りたり。逍遙院の勢語講筵ついなに列りし清原宣賢、この書に序を添へて譽むることいとねもころなれど、堯空すでに愚見抄と肖聞抄を見たりけむことこの序より推し測るをうべし。逍遙院の花の林の一首を解けるさま宗祇肖柏に異らねどもいと言短かにて、ここにもまた同じ詩句を引きたり。

この歌につきて北村季吟の拾穂抄の内に言へること逍遙院の述べりしとさらに違はず。

これら諸抄より後おくれて世に出でし勢語臆断にて契沖阿闍梨、初め五字に續けて、雲のたとまちかくらふはと讀めれど、このかくらふの語をなほかくすの意にとれるはいささか心えがたし。きのふけふの雲の晴れやらず立ち出でて山を隠せしは、この千萬樹の花の林は、さきより咲きてんをうしと妬みてかくすなりけりと興ずるのあまりに詠み出でたるものなりと記せる阿闍梨の説きやうや詳かなれどおほかたのおもむきさまで新しからず、山口抄肖聞抄などにまでに説けりしに異なることなし。

(令和二年十二月三十日受附)